

ご挨拶



神奈川大学学長 山火 正則

本学は、前身が旧制の専門学校（横浜専門学校、1929年創立）であったこともあり、伝統的に実学教育を重視し、優れた人材の輩出に大きな成果を挙げてまいりました。

しかしながら、他方で、大学が「研究に基づく教育の場」であるという強い認識のもとに、「研究と教育の融合」を基本理念とし、教育とともに研究面における充実に努めてまいりました。とくに、21世紀を目前にした頃からは、21世紀に燦然と輝く大学を目指し、偏差値による序列化を超えた個性的な大学になるために、研究面についても「神奈川大学の顔の見える研究」という観点から、それまでのどちらかといえば全学の研究水準を引き上げるために平均的なものになりがちであった研究支援を、重点的なものに移す方向性を打ち出してきました。例えば、本学には、日本常民文化研究所など7つの研究所がありますが、1999年からこれらの研究所予算とは別に、研究所を横断する共同研究奨励のための制度を創設し、また若手・中堅研究者の優れた研究成果に対する学術褒賞の制度を設けたのは、その現われです。こうした試みの成果は、文部科学省の科学研究費の採択に相当な実績を挙げ、さらに、工学研究科（部）や理学研究科のハイテク・リサーチ・センター、あるいは学術フロンティアの選定などに現れています。

本学といたしましては、さらに個性的・卓越的な研究を強力に推進して、その成果を後世に伝え、それを通じて国際競争力のある個性輝く大学として発展したいと考えていますが、そのためには、先に述べた重点的研究支援の方向への転換を一層明確にすることが必要です。今回、文部科学省によって採択された21世紀COEプログラム『人類文化研究のための非文字資料の体系化』は、本学における重点的な研究支援のモデルケースとして、その方向性に弾みをつけ、ひいては本学が世界的な研究拠点のひとつとなることにより本学の「高等教育機関」としての発展をより確実なものとするものとして、大きな意義を有するものです。その意味で、このプログラムの遂行、研究拠点の形成のためには、大学は万全の支援体制をとることにしております。

最後に、このプログラムが成功裡に遂行され、研究拠点が形成されることにより、人類文化の研究がいつそう豊かなものになるよう、学内外の皆様の絶大なるご支援を御願ひして、ご挨拶とさせていただきます。